

## 日本統治期における女性像の異同

—特に龍瑛宗と西川満の作品を中心に—

台湾大学大学院生 侯 紀安

日清戦争講和の下関条約が締結された1895年4月から、第二次世界大戦終戦の1945年8月まで、台湾はほぼ五十年の歳月、日本の植民地であり、植民者を代表する現代文明と資本主義は、封建社会の台湾において大きな文化衝突を起こした。固有の原住民の文化、西欧のオランダとスペインの占領、漢民族（鄭氏政権と清国）の統治などの各時期において、異なる文化が相互交流していた台湾は、日本という新しい異文化の挑戦を迎え、排斥したり、融合したりする過程を通して文化的変容をするに至った。

1930年代後半、「外地文壇」の台湾に最高文化指導者の地位を占めたのは西川満という文学者であった。彼は異国情緒の手法と華麗な言語表現を用いて台湾特有の民俗文化を文学の形式に発揚していた。彼の作品においては、女性を素材とする作品が多い。その中で繊細で美しい筆致で描出される「藝姐」というイメージは、西川満の小説における鮮明な特色だと思われる。一方、同時代に現れた台湾人の代表的な文学者の龍瑛宗は、西川満と同じ陣営「台湾文芸家協会」に属し、互いに文学上の往来が頻繁であった。浪漫主義の洗礼を受けた二人は、感性的な詩人の目を持ちながら、文学の美の境界を求める姿勢は近似していたが、植民者と被植民者という立場の相異、作品に表現された意図の差異などの要素が、彼らの作品の女性にどう反映されるのかを考察する。

本稿では、特に西川満の「稲江治春詞」と龍瑛宗の「知られざる幸福」を主として分析することを試みる。前者は日本人男性と台湾人藝姐との交際をきっかけで、女が藝姐になる理由とその背後の物語を描き、後者は台湾人の女性が悲惨な生活に直面している勇敢な姿と、自身に属する幸福を追求する姿を描いている。

キーワード

植民地文学、台湾文学、西川満、龍瑛宗、稲江治春詞、知られざる幸福